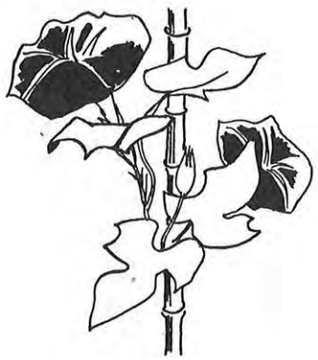
暮らしと県政・熊本

No. 7　1973

―目　次―

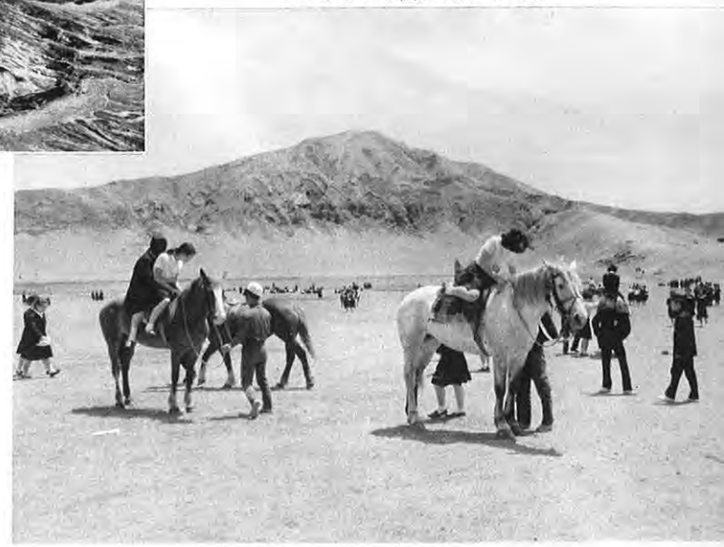
■環境特集
・大気汚染・水質汚染・騒音の実態……8
　═S47年版公害白書═
・ゴミ・ヒト問答……15
　──産業廃棄物実態調査報告──
・6月補正予算にみる水俣病対策……26
・海よ堪え抜け
　徳田幸雄……29
・美しい熊本づくり運動……30
・解説公害用語……14
■ルポ広がる緑の輪……24
■<この人と30分>
　熊本の水は宝物　堅山南風……32
■工業誘致の必要性と困難について
　山崎良也……36
■グラビアページ
・<ふるさとの心>阿蘇草千里……3
・水銀環境汚染対策等に全力……17
・カラー熊本……20
・みんなで住みよい生活環境を……22
・好成果を収めた青果物輸送改善対策事業……37
・深まる日中友好の〝きずな〟……38

随　想　欄……6
　四宮　知郎・古金ふみ子・石津　治



表紙は山鹿灯篭　紙とノリで作られる民芸品で毎年8月15日山鹿市大宮神社に奉納される

▲写真右上の草原が草千里



▼行楽客で賑わう草千里
さわやかな風が頬に心地よい

草千里

熊本の町に育った人は、若いときに一度はみずからの足で阿蘇を歩いたはずである。そして、草千里のなだらかな起伏に身を置き、中央火口の噴煙を遠く望んだはずである。

草千里は、多少の甘美な言葉を許されるならば、いわゆる「青春の思い出」がそれぞれの胸のうちに深く残されているところだ。

われ嘗てこの国を旅せしことあり
味爽のこの山上に　われ嘗て立ちしことあり
肥の国の大阿蘇の山　裾野には青艸しげり　尾上には煙なびかふ

詩人三好達治は昭和十一年秋この地を訪れ、過ぎゆきの思い出を「草千里」という詩の一篇に託した。

若き日のわれの希望と
二十年の月日と　友と
われをおきていずちゆきけむ
ひとり草原を散策した老いし詩人も今は世を去り、ここに眩ゆいまでに夏草が繁る。

有史以前のむかし、烏帽子岳の北斜面に直径一㌔にわたる火口が生まれた。ここの火は夜も昼も中天にむかって立ちのぼったときがあったであろう。やがていつかその激しい鳴動が止まり、火口原にはふたつの小さな湖とひとつの丘陵をのこして芝草が覆った。

いつのころからかこの地は「草千里」と名づけられた。

いま、草千里は中央火口丘にむかいあって穏やかな微笑をたたえながら、荒れ狂う噴煙をたしなめ、やさしく見守っているかのようにみえる。

それは、私たちに、厳しい生活に耐え、子を育て終わり、いつの間にか温顔になっていった老いし母を思わせるようだ。

ゆく春のこの曇り日や
われひとり齢かたむき
はるばると旅をまた来つ

三好達治が洩らした感懐をここに集う若人たちもいつかは抱いて二度も三度も訪れるであろう。

熊本に生きるということは、阿蘇の山なみのこころがおのれのなかに育ってゆくことでもあるのだ。